



「かかわる力」を育成する幼小中一貫教育の活動と
その特質(その5)

-宮崎大学教育文化学部附属学校園の取組5「好きな
遊び」(幼稚園)・各教科(小・中学校)・教育実習に関
する基盤的な実践-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター 公開日: 2014-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安藤, 真二, 鵜戸, 周成, 福島, 祐子, 河原, 国男, Sinji, Ando, Udo, Shusei, Fukushima, Yuuko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5805

「かかわる力」を育成する幼小中一貫教育の活動とその特質 (その5)

— 宮崎大学教育文化学部附属学校園の取組⑤

「好きな遊び」(幼稚園)・各教科(小・中学校)・教育実習に関する基盤的な実践 —

安藤真二* 鶴戸周成** 福島裕子*** 河原国男

The Characteristics of Unified Educational Activities from Kindergarten and to Early Secondary Levels in order to Foster Each Child's Abilities to Relate to Others and Things (Part5) : Focusing on Basic Educational Activities : Play (kindergarten), Subjects and Teaching Practice

Sinji ANDO*, Shusei UDO, Hiroko HUKUSHIMA*** and Kunio KAWAHARA**

1 はじめに

本稿は一連の論稿とともに(以下、本研究)、宮崎大学教育文化学部(平成28年度以降は教育学部)附属幼稚園・小学校・中学校(以下、3附属学校園)において「かかわる力」を育むということが一貫した教育目標としてどう位置付けられ、どのような教育活動として展開しているかをまとめ、その取組の特質を考察するものである。「かかわる力」の概念については、本研究の(本研究紀要、第24号掲載の同名論文その1)において規定した。とくに本稿では附属幼・小・中学校においてもっとも基盤的な教育活動として位置付けられる「好きな遊び」(幼稚園)、各教科(小・中学校)、教育実習をとりあげる。

2 「かかわる力」を育む活動 —基盤的な実践—

1) 「好きな遊び」(附属幼稚園)

① 好きな遊びの中での保育

本園では、1日の大部分(9:00~11:00、12:30~13:20)を幼児の主体的な活動である遊び「好きな遊び」を中心に保育を行っている。本園での「好きな遊び」とは、子どもの実態に合わせて教師が環境を整え、その中で、子どもが自分のしたい遊びを自由に考えて取り組むことができることをいう。

園庭において子どもたちはさまざまな遊びをする。砂遊びや鬼ごっこ、サッカー遊び、野球遊び、雨上がりの園庭での水遊び、落ち葉を使った遊び、バッタやトンボなどの虫捕り、固定遊具への挑戦などが見られる。室内では、家族ごっこやショーごっこ、空き箱や様々な材料を使った製作遊び、カラー積み木での家造り、テラスでは、色水遊びやしゃぼん玉遊びなど多くの遊びに取り組んでいる。

*宮崎大学教育文化学部附属中学校校長

**同附属小学校校長

***同附属幼稚園教頭

② なぜ「好きな遊び」がよいのか

まず、子どもたちが好きな遊びに熱中するということは、それ自体が子どもにとって価値あることである。子どもは、もともと遊ぶ存在であり、自発的・意欲的活動によって、力いっぱい遊ぶときにこそ幸福であり、自己充実を感じると思われる。

次に、子どもは本当に好きなことであれば、自分の持つ全力を発揮する。気の進まないことをさせても子どもは熱中しないし、長続きしない。教師主導によりさまざまな選択ができない保育ばかりでは、子どもの能力の調和ある発達を期待することはできないだろう。

さらに、入園直後の子どもたちは、何をして遊んだらよいか分からずに困っていることが多いが、そのような中でも、教師のはげましや年上の子どもの遊ぶ様子を手本にしながら自分のしたい遊びを選択できるようになったり、主体的に遊ぶようになったりする。自分で考えて判断できるようになると思われる。(図1)

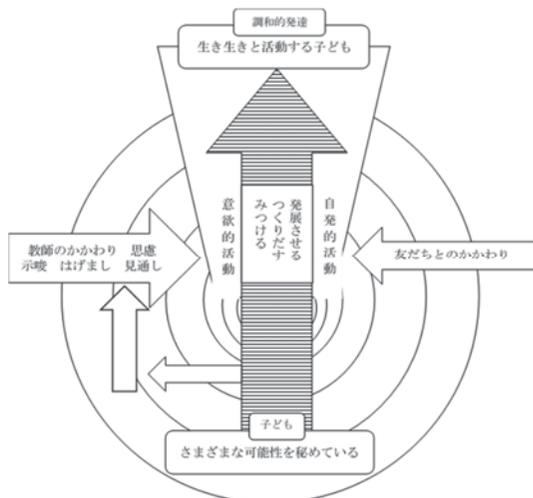


図1 「好きな遊び」と「かかわる力」の関係

③ 「好きな遊び」で育つと期待される力とは

遊びそのものに関する能力だけでなく、意欲や友達づきあいなどいろいろな活動や人との「かかわる力」や、機敏な判断や物事の処理能力などの「考える力」、自分の気持ちを言葉で伝えたりする「表現する力」などを、本園では育てたい3つの力として位置付けている。

その点を次の事例によって示す。

事例 カラー積み木の遊びの様子から

年長児H男がカラー積み木を使って家をつくり、その家の中に入っているとき、家が突然壊れた場面である。教師は、H男が怒るのではないかと思いつつも、その場の雰囲気を和らげたいと思い、笑いながらも「どうしたの?」「地震が起こったの?」と発言し、様子を見守った。すると、周りにいた子どもたちも、笑ったり、「地震だね」と言ったりしながら集まってきた。H男も驚いた表情から、軟らかい表情に変わっていった。教師はH男に再度「どうしたの?」と尋ねてみると、H男もどうして壊れたのかが分からずに首を振るだけだった。すると、同じクラスのA子が「私がこっちの方を長くしようとして、積み木を置いたら壊れちゃった」と正直に話してくれた。H男はA子のお話を聞くと納得したようで、その後、その場にいた子どもたちも一緒に家を直し始めた。

保育カンファレンスを行った際に、教師がH男の気持ちを心配しながらも笑顔で「どうしたの?」と尋ねたことでH男だけでなく、周りの子どもたちの気持ちをほぐし、H男にとって気持ちを立て直すきっかけを作り、よい援助だったのではないだろうかという結論になった。また、A子が正直に自分の失敗を言ってくれたこともH男の気持ちを立て直しにつながったと思われる。このように、積み木の家が壊れたときに子どもたちが互いの失敗を許したり、認めたりすることができるのは、日頃子ども同士や教師と子どものかかわり合いが許し合える関係

になっているからであると考えられる。

④ 教師の支援

好きな遊びに子どもが主体的に取り組むためには、気持ちの安定を図る必要がある。先生がそばにいて子どもたちは安定し、子どもは自分から遊びに関心を持ち、遊びに集中するようになり、自分で考えて行動するようにもなる。また、同じような遊びをしている友達の様子を見たり、声を掛け合ったりするようになり、友達にも自分からかかわろうとするようになる。このように、自分をあたたかく受け入れてくれる先生とのかかわりから信頼関係が生まれ、それを基盤に安心感をもってやりたいことに取り組むことで、かかわりが生まれ、深まってくるのである。

2) 各教科（附属小学校・附属中学校）

① 附属小学校

i) 音楽科の実践（第5学年：題材名「音のスケッチ～滝トレッキングの音楽をつくろう～」）

本実践（担当：音楽専科 谷口朋美）は、指定された事前の体験活動（集団宿泊学習での自然体験「滝トレッキング」）をもとに、そのイメージにあった「音づくり」を行う学習である。

具体的には、個人個人のもつイメージを出し合い、それを鍵盤楽器や打楽器を駆使して、小集団で一つのイメージ音楽を作り上げる学習である（資料1）。

資料1 附属小学校 音楽科「音のスケッチ」における目標

学 年	教科等	題材名	日 時
第5学年	音楽科	音のスケッチ ～滝トレッキングの音楽をつくろう～	平成27年7月15日(水) 5校時
目 標	表現—鑑賞—表現という題材構成とする。第1時は即興的に表現する活動を取り入れ、音楽づくりを楽しませる。第2時の鑑賞では、聴き取ったことと感じ取ったこととのかかわりを捉えさせる。第3時以降は、鑑賞の学びを音楽づくりに生かすことで、自分にとって価値ある音や音楽を見付け、更に感性が磨かれるようにする。 また、感性を磨くために、聴く活動をたくさん取り入れた学習活動を行う。自分の音楽や友達の音楽と向き合う活動を教師が意図的に設定することで、新しい表現に出会うことができるようにする。また、知覚・感受したことを表現に結び付ける言葉かけをすることで、感性を磨くことができるようにする。		

「滝トレッキング」体験から個々にイメージする音を、最終的には小集団で作る学習活動であるので、特に友達との「かかわり」をとおして完成させていくことになる。

「滝トレッキング」の情景等を思い浮かべながら、出発→山の入口→山の中→滝→（帰途）までに五感をとおして体験、体感したことを音に表現する。

本研究でいう「かかわる力」との関連では、相手の考えを受け止め、また、逆に自分の思いを伝える「傾聴力・発信力」、仲間が発する多様な音を受け止め、イメージにあった音を集めたり、選択したりする「課題設定力」が培われる実践といえる。

授業者は、音楽（音）とのかかわりや 自身の思いや作り出した音（自己）とのかかわり、さらには、小集団内の友達、先生とのかかわりが積極的にもてる場を提供・工夫しながら「音づくり」の授業をすすめた。資料2、3に、実際の指導場面の「指導計画・過程」等を示す。

資料2 附属小学校 音楽科第5学年「音のスケッチ」の授業実践計画

○ 指導計画（5時間）

(1) 滝トレッキングの様子や行藤山の自然を即興的に楽器で表現する———1時間【関・意・態】
(2) 「山道に行く」を聴き、曲想とその変化等の音楽のよさやおもしろさを感じ取る。———1時間【鑑】
(3) 全体の流れを考えながら滝トレッキングの音楽づくりをする。—————2時間
・ 山の入り口の場面の音楽づくり……………1【創】【技】
・ 山の中、滝の場面の音楽づくり……………1（本時）【創】【技】
(4) 滝トレッキングの音楽の発表会を行い、互いの表現のよさを認め合う。——1時間【関・意・態】

○ 本時の目標

山の中に入ってから滝に着くまでの足音や自然をどのような音楽にするのか、思いや意図をもつことができる。

○ 指導過程

学習活動及び学習内容	教師のかかわり
<p>1 本時学習内容をつかむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 入口場面のグループ音楽の聴取 <ul style="list-style-type: none"> ・ 強弱 ・ 速度 ・ 音の重なり ・ 始まる感じ、続く感じ ○ 本時のめあて <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 強弱や速度を工夫して、山の中、滝の場面の音楽をつくろう。 </div> 	<p>◎ 鑑賞で用いた掲示物を提示し、聴き取ったことと感じ取ったことを結び付けて表現できたことを称賛することで、鑑賞の学びを表現に生かす喜びを実感できるようにする。</p>
<p>2 学習の見通しをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 音楽の作り方 <ul style="list-style-type: none"> ・ 場面（山の入り口ー山の中ー滝） ・ 足音と自然の様子（強弱、速度、音の重なり） 	<p>○ 強弱を変化させて範奏し、疲れた気持ちをどう表現したのか問いかけることで、「山の入り口よりも音が弱くなったから疲れた感じがした。」等、音楽の作り方を確認することができるようにする。</p>
<p>3 場面を意識した音楽づくりに取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 自分の思いや意図 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 山の中に入ったらどんどん疲れてきたから、少しずつゆっくりした </div> ○ 小集団での聴き合い <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 私もうっとりしたけど、途中で休んだから、時々休符を入れてみたけど、どう。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 休憩した感じが出ていていいね。ぼくも少し休符を入れてみる </div> 	<p>○ 第2時での鑑賞の学びや第3時でつくった音楽を基に強弱や速度を変化させるよう助言することができるようにする。</p> <p>◎ 同じ役割の友達と聴き合い、友達の音楽を真似して表現してみたり、互いに感想やアドバイスを伝えたりし合う活動を取り入れることで、よりよい表現ができるようにする。</p>
<p>4 グループで一つの音楽に合わせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 場面に合わせた音楽 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 私は風の役だけど、ずっと同じ繰り返しでいいのかな。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 疲れてくると風も感じなくなったから、山の中の場面では弱くしてみるといいかもね。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> こんな感じかな。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> う～ん…もう少し弱くてもいいかな…もう1回やってみて。そうそう、今ぐらいの強さがいいよ。 </div> 	<p>○ 「音の重なり」「強弱・速度」「音楽の終わり方」の3つのポイントを中心に、時間を区切って指示することで、視点を明確にもって試行錯誤することができるようにする。</p> <p>○ 話し合いが滞っているグループには、具体的な助言や範奏を行いながら共に音楽づくりをすることで、話し合いの進め方や互いの音の重ね方を理解できるようにする。</p>
<p>5 試しの発表を行い、学習のふりかえりをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 互いの音楽のよさ ○ 次時の見通し <ul style="list-style-type: none"> ・ 発表会 	<p>○ 互いの音楽のよさを認め合う場では、子どもの意見を更に教師が価値付けることで、音楽をつくる楽しさや自分たちのグループの音楽の価値を感じることができるようにする。</p>

資料3 附属小学校 音楽科「音のスケッチ」の授業風景



「かかわる力」との関連

・学校行事のひとつである集団宿泊学習で共通体験した「滝トレッキング」を基に音楽づくりに取り組むことで一人一人が意欲的に活動を行い、音を通しての話し合いも活発に行われた。
 ・かかわることを意図して、「教師とかかわる場」、「自分の音や音楽（自己）とかかわる場」、「同じ役割の友達の音楽とかかわる場」、「同グループ内の友達の音楽とのかかわる場」を設定したことで、「傾聴力・発信力」に関し、子ども相互、あるいは子ども自身と音楽とのかかわりを積極的に求める姿が認められた。

ii) 図画工作科の実践（第5学年：単元名「糸のこのドライブ」）

本実践（担当：岩切武志）は、一枚の板に自由に「電動糸のこ」の刃を這わせ、一枚の板から生み出された複数の板を自由に組み合わせて作品を作り上げ、その活動を楽しんだり、または、生み出された板を見て想像する形やものを手がかりに、作品へとイメージを膨らませたりする学習である。特にここでは、自身や友達の板の形や組み合わせた作品を見ながら、自身の感性をことばに出してアドバイスし、それらをもとに一層、イメージを膨らませて作品を完成させていく学習である（資料4）。

資料4 附属小学校 図画工作科「糸のこのドライブ」における目標

学 年	教科等	単元名	日 時
第5学年	図画工作科	糸のこのドライブ	平成27年7月13日(月)5校時
目 標	本題材では、電動糸のこを扱う技術に親しませ、習得させるために「切り出した板に切り込みを入れて組み立てる」という条件設定を行います。そうすることで、電動糸のこを扱う回数を必然的に増やし、電動糸のこを扱う技術を習得させます。また、立体作品は向きや角度で見え方が違うことを理解させたいうえで、見え方や組み合わせ方をアドバイスさせ合うことで、作品のイメージをわかせたり、一段と膨らませたりできるようにします。		

この学習活動では、1枚の板に切り込みを入れ、生み出された複数の板片を組合せ、そのイメージをもとに作品をつくっていく学習である。板片の組合せによって、いろいろな作品ができ、その中から一番お気に入りの作品に、次時からは着色等を加えていくことなる。資料5に、実際の指導場面の「指導計画・過程」等を示す。

資料5 附属小学校 図画工作科「糸のこのドライブ」の授業実践計画

○ 指導計画（8時間）

(1) 電動糸のこで板をおもしろい形に切り出し、学習計画を立てる。・・・2時間	【関・意・態】【技能】
(2) 切り出した形の特徴を活かして組み合わせながら立体に表す。・・・5時間	
・ 切り込み入れ・・・1	【技能】
・ 組み合わせ、着色・・・4（本時1／4）	【発想・構想】【技能】
(3) 切り出した形や組み合わせた形のおもしろさについて伝え合う。・・・1時間	【鑑賞】

○ 本時の目標

切り出した形の特徴を活かして組み合わせながら、作品のイメージをもつことができる。

○ 指導過程

「◎」は研究内容にかかわる中心となる手立て

学習活動及び学習内容	教師のかかわり
1 本時の学習内容について話し合う。 ○ 参考作品の作品名の予想 ○ 本時のめあて <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 5px 0;"> いろいろな形に組み合わせてみよう。 </div>	○ 参考作品を提示し、作品名を予想させることで、切り出した形を組み合わせてももしろい立体作品をつくりたいという思いを高めることができるようにする。
2 本時の学習の進め方について確認する。 ○ 本時で大切にしたい技術 ・ 組み合わせ方 ・ 見立てる際の向きや角度	◎ 自由に発想を広げながら活動に取り組めるようにするために以下の手立てをとる。 ・ 切り込みを増やしたいという子どもには、その理由を問い、必要性を確認したうえで、切り込みは増やしてよいことを伝える。 ・ 作品を見立てる際の向きや角度に留意させる。
3 切り出した形を組み合わせる。 ○ 組み合わせ方 ・ 縦方向への広がり ・ 横方向への広がり 	○ 移動中に友達の作品をたくさん見ることができるようにするために、電動糸のこを扱う場所をあえて自分の席から離れた場所に指定する。 ○ 切り込みを一つ入れたら、次の子どもと代わるようにさせることで、より多くの子どもが技術に親しめるようにする。 ○ 試行錯誤しながら組み合わせている子どもを称賛することで、いろいろな組み合わせ方を試すことに意欲的に取り組むことができるようにする。 ○ 手が止まっている子どもに対しては、「どこどこを組み合わせることができるか」と問い、実際に組み合わせることができるようにする。
4 何に見えるかについて話し合い、作品名をつける。 ○ 予想される子どもの考え ・ 横を向いたアザラシ ・ ちょっと不気味な城 ・ ジングル 等	○ 4人組を机の四方に座らせることで、向きや角度によって作品の見え方が変わることを利用し、本人も気付かなかった見方に気付かせるようにする。 ◎ 組み合わせ方を互いにアドバイスさせ合うことで、イメージをわかせたり、一段と膨らませたりできるようにする。
5 本時の学習についてふりかえり、次時の学習の見通しをもつ。 ○ 作品名のふりかえり	○ 自分の作品に作品名をつけられたことや、イメージをもてたことを称賛し、次時への意欲を高めることができるようにする。

「かかわる力」との関連

相互に作品を批評し合い、評価し合いながら、学習を進めていくので、「かかわる力」の中でも、

・「傾聴力・発信力」（相手の考え・意見を受け止めて、仲間同士の考えのよさや共通点・相違点を考えたり、複数の考えが整理できないか考えたりしながら聴くことができる。）

・「状況判断力」（入手した情報をもとに自他の状況を冷静に見つめ、整理することができる。）

・「課題設定力」（多様な情報を収集し、整理・分析するなどしてまとめることができる。）

との関連をもって学習が進んでいった。

② 附属中学校

平成27年7月の公開研究会で実践した各教科の中から、2教科の実践（社会科：鬼塚拓 数学科：尾関信一）を紹介する。ここでは、各教科の授業実践（本時の指導過程）と「かかわる力」（本研究紀要、第24号掲載の同名論文その2 中学校における「かかわる力」の5つの能力）との関係を整理した。

i) 社会科の実践

授業の概要（表1、資料6）

表1 附属中学校 第3学年社会科の実践例

単元名 現代社会の見方や考え方（対象 3年生40名） 単元の指導計画 6時間（本時は5時間目）	
本時の目標 ○ IQ（TACの個別割合）方式をよりよく運営していくための望ましい（社会的に正しいと思える）“分配ルール”を提案することができる。	
本時の指導過程	「かかわる力」の能力
1 前時の学習内容を振り返る。 ・TAC制度に潜む問題点 ・受益層と受苦層が分離した状態（=問題状況）の解決の方向性と具体的な解決策	（状況把握力①）
2 IQ（TACの個別割合）方式を知る。 ・IQ方式とは、年間可能漁獲量（TAC）にもとづき、漁船や人ごとに年間可能漁獲量を割り当てる方式である。	状況把握力①
3 望ましい（社会的に正しいと思える）年間可能漁獲量の割り当て（分配のルール）を考える。 どのような分配ルールが望ましいのだろうか？ ○ 前年度までの業績にもとづいて年間可能漁獲量を配分すべきだ。 ○ 持っている船の大きさや性能にもとづいて年間可能漁獲量を分配すべきだ。 ○ すべての漁業者に均等に分配すべきだ。	課題設定力①②③
4 グループで考えを交流させ、グループとしての考えをまとめる。	方法選択力①②
5 代表グループの発表を聞き、自分たちの考えと比較する。	傾聴力・発信力 方法選択力②

資料6 附属学校 第3学年社会科のワークシート記載例

前提

① T A C 制度で決められた年間可能漁獲量は、制定される前よりも少ない量の魚しか捕ってはいけないことになっている。

② 「社会的」ということは、受益者受苦者などが不平・不満があったとしても、客観的に見て正しいということである。

↓

T A C 制度がつくられる前
それぞれこのような数で捕っていた場合

A
900

B
100

T A C 制度で全体で捕っていい量が100になったら
パターン①

他者との比較

なぜ正しいと言えるのか？

↓

元々、AとBには9：1でAの方がよく捕れるという差があった。全体で捕れる量が1/10になったときも9：1という差はそのままに、規模だけが縮小した形になれば、T A C 制度がつくられる前と変わらない力関係を保てる。

このパターンの問題点

割合は同じだが、減った分はAが810、Bが90で、Aの方が多い。→
受益者から不満

↓

前提②によって各個人の受益、受苦は考えないことにしているため、社会的に考えるとこの問題は解決。(女子)

割り当てない（I Q方式を採用しない）のが正しい。

ルール化して、一人一人の漁獲量を定めれば、旧受苦層の人からの苦情はなくなるかもしれない。が、旧受益層の人たちからは苦情が来るかも？

↑

以前よりは漁獲量も減るわけだし、

100匹とるのが普通だったのに、75匹までしか捕ってはいけないとルール化されてしまった。旧受益層の人たちはいつまでも同じ量だけの魚を獲り続けてきたが、いい加減、さらなる益を欲してきた人たちは、「共有地の悲劇」を起こすのでは？

結論：T A C 制度のままがいい。(男子)

ここでは、課題設定についての考え方が正しいかどうかは問題ではない。生徒が、「かわる力」の課題設定力に係る解決すべき問題について、自分なりの考えを整理してある程度客観的に整理することができたかどうかが大切である。その点については、資料7、8から可能であったことがうかがえる。

資料7 附属中学校 第3学年社会科 授業後の感想 その1

漁業者の人の目線から問題を見ていく中で、TAC制度、IQ方式などの条件も含めてどんどん条件を増やしていくことで、そのときの問題のとらえ方が異なったり、新しい考えや詳しく分析することで考えを深めていくことができた。

これと同じように、受苦、受益、予想ぐらいつか社会の見方、考え方がわからなかったのだ。そこに、新しい考え方をプラスしていくことで視野が広がった。今まで習ったことを公民で生かすことができれば日常でも自然と使えるようになると思う。

それ以前にこの考え方は知っていても、この考え方は「受苦、受益」だとか、「効率」だなどは分らずに、日々の日常で頭で勝手に考えていると思う。

自分が現在、知っている情報をもっと深めて自分で理解するために、いろんなところから情報を入手して条件を増やして考え方を変えたり、分析したり、予期したり、これが意図をもってできるようになったら、この授業は学校や入試だけじゃなく、日常の社会で生きていく上で活用できると思う。トレーニングの意味でも公民の授業で練習・応用していきたい。（男子）

資料8 附属中学校 第3学年社会科 授業後の感想 その2

今回の授業は久しぶりによく分らなかった。私が授業中に書いたことと、次の時間で紹介された「○さんの考え」というのが全く異なっていた。私は違う意見を持っているのに他の人の意見で授業をすすめられて途中でついていけなくなった。

社会に答えはないと言いつながら、思い切り授業で答えが示されているように思えた。また、なぜ紛争解決をパターン化するのでしょうか。そんなに難しい感じで紛争解決パターンが示されても分かりません。そんなことばかり気にして次に進めなくなったので、授業の内容がよく頭に入っていない。

先生は〈考えること〉をととても大切にしています。私もこの漁業についてはたくさん考えさせられました。少子高齢化を習ったあと、活気がない町村や公園（遊園地）に行くと、経済のこと、過疎のこと、たくさん気になって旅行が楽しくないです。きっとこれからも家で焼き魚が出るたびに漁業のことしか頭にないと思う。（女子）

ii) 数学科の実践

授業の概要（表2）

表2 附属中学校 第1学年数学科の実践例

単元名 平面図形（対象 1年生40名） 単元の指導計画 16時間（本時は10時間目、基本作図の4時間目） 直線図形と移動（6時間）、基本の作図（4時間）、円とおうぎ型（6時間）	
本時の目標 ○ 観察、操作、実験などの活動を通して、直交する2枚の鏡に映る3つの像を図形の移動の見方ととらえ、用語・記号を使って自分なりに説明することができる。（数学的な見方や考え方） ○ 定規、コンパスを用いて、直交する2つの鏡に映る3つの像を作図することができる。（数学的な技能）	
本時の指導過程	「かかわる力」の能力
1 前時に行った、1枚の鏡に映る像のかき方について振り返る。 2 本時の問題を確認する。 2枚の鏡を90度になるように立てました。 その前に正三角形をおくとき、像はどのように映るでしょうか。	状況把握力①
3 2枚の鏡に映る像の数について予想を立てる。 ○ 2つ、3つ、4つ、わからない。	

<p>4 ペアで2枚の鏡を使って、像が3つあることを確認する。</p> <p>5 本時のめあてを確認する。 用語や記号を使って、自分なりに作図のし方を説明しよう。</p> <p>6 2枚の鏡に映る像を作図する。 ○ 垂線のかき方を利用している。 ○ 垂直二等分線のかき方を利用している。 ○ 角の二等分線のかき方を利用している。 ○ 対称(点・線)の考えを利用している。</p> <p>7 グループで作図のし方を説明し、グループ内でまとめる。</p> <p>8 グループの発表を聴く。</p> <p>9 他の図で像をかいてみる。</p> <p>10 授業の感想を書く。</p> <p>11 本時の活動を振り返る。</p>	<p>状況把握力①②</p> <p>課題設定力①②③</p> <p>方法選択力①②</p> <p>傾聴力・発信力</p> <p>方法選択力②、(課題遂行力③)</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------

本時に生徒が記載したワークシート例 (資料9、10)

資料9 附属中学校 第1学年数学科 本時の指導過程の7 (表2参照) ワークシートその1

元となる三角形を $\triangle ABC$ とする。鏡に映っている3つの三角形を $\triangle DEF$ 、 $\triangle GHI$ 、 $\triangle JKL$ とする。

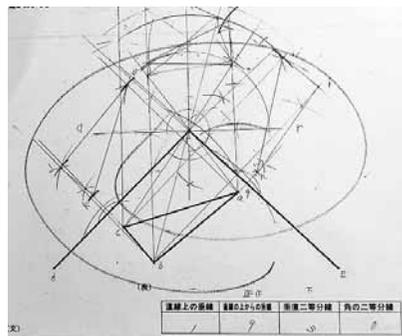
～やり方～

- ①対称の軸をつくるために、鏡の線を長くする。その軸を軸M、軸Nとする。
- ②対称移動するために、直線の上からの垂線を利用して軸M \perp 直線ADとなるように垂線を引く。(他のもすべて同じように)

資料10 附属中学校 第1学年数学科 本時の指導過程の9 (表2参照) ワークシートその2

説明文

- 1 元の三角形を $\triangle abc$ とする。
- 2 直線Fd、FEを垂直二等分線、直線上の垂線を使って延長線をかく。
- 3 点aから直線FEの上から垂線をかく。
- 4 点a、gの長さをコンパスでとって、反対側に印をつけ、点hをつける。
- 5 点bからも、3.4と同様のことをする。→点iができる。
- 6 点cからも、3.4と同様のことをする。→点jができる。
- 7 点h、i、jを結ぶ。→ $\triangle hij$ ができる。
- 8 点cbaから直線fbの上から垂線をひき、印をつけ。点klmを作り($\triangle klm$ ができる)結ぶ。
- 9 点abcから、直線fbの上から垂線をひき、印をつけ、点pon($\triangle pon$ ができる)結ぶ。



像をかいたもの

このように生徒は、「かかわる力」の方法選択力に係る解決すべき問題について、作図についての見通しや過程、結果を自分なりに説明することができたかどうかが大切である。

3) 教育実習

附属小学校

① 教育実習終了時の「お別れ式：実習生を送る会—別れに際して思いを形にして感謝する場面—」

本校では、毎年8月下旬から9月中旬にかけての3週間、学部3年生を中心にして、3週間の教育実習が行われる。

例年、100名弱の小学校教員をめざす学部生等が、全18学級に分かれて配属され、小学校教員としての経験を積む。すべての学生がいずれ教員になることを前提に、本校教員と子員と子どもたちとともにその実習に没頭する3週間となる。

その最終日には「実習生を送る会」(資料11、12)を児童で組織された運営委員会が中心になって、お別れ式を計画、運営する。

表3に、その計画案を示す。

資料11 附属小学校「実習生を送る会」の様子 その1

表3 附属小学校 平成27年度「実習生を送る会」計画案

1	日時	平成27年9月18日（金曜日）1校時
2	場所	附属小体育館
3	参加者	全児童 教育実習生 学校職員
4	内容（プログラム）	
	□教育実習生入場	
①	はじめのこぼ（運営委員児童）	
②	今月の歌 全体合唱「Tomorrow」 （指揮：運営委員児童）	
③	お楽しみゲーム（運営委員児童と教育実習生）	
④	お別れのこぼ（学年毎） ※1年生から順に	
⑤	教育実習生代表挨拶	
⑥	おわりのこぼ（運営委員児童）	
	□教育実習生退場	
	※	その後、学級毎に「お別れ会」を実施する。



資料12 附属小学校「実習生を送る会」の様子 その2



② 「かかわる力」との関連

この活動では、内容（プログラム）の「4 お別れのこぼ」が中心であり、各学年毎（あるいは学級毎）に、呼びかけ風に実習中の思い出を、子どものこぼで実習生に向けて呼びかける。しかも、教育実習生個別に、3週間の中でその思い出となるシーンやかかわりを子どもたちでこぼを考え、呼びかけ風に実習生に伝える学年・学級もある。資料13、14、15に、「お別れのこぼ」の実際等を掲載する。

資料13 附属小学校 「実習生を送る会」教育実習生に向けたメッセージ：第3学年

- ・おおきな体の ○○○○先生 クラスみんなの パパみたいでした。
- ・目力ありすぎ ○○○○先生 もっといっしょに 勉強したかったです。
- ・笑顔がまぶしい ○○○○先生 その笑顔に みんなむねキュンでした。
- ・おおきな声の ○○○○先生 シンデレラドレスとってもあってました。

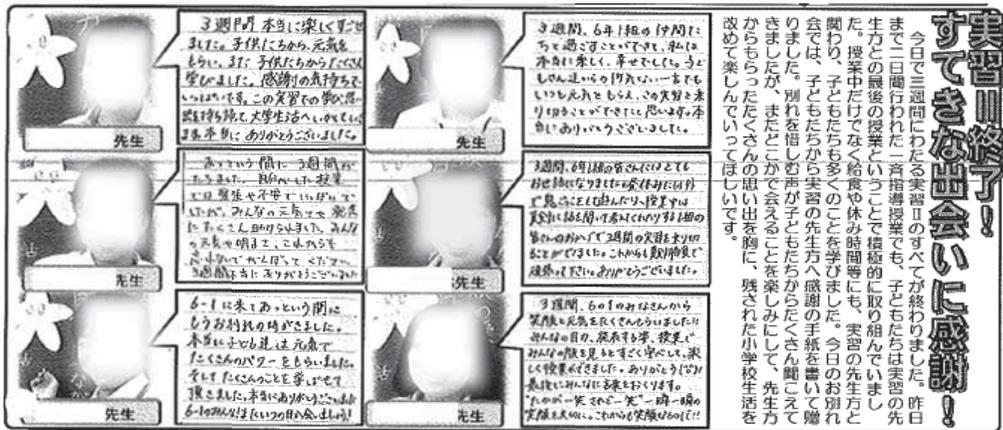
- ・メガネがにあいすぎる ○○○○先生 変顔もかわいかったです。
- ・フルート名人 ふろしき名人 ○○○○先生 名人のわざ わすれません。
- ・元気モリモリ ○○○○先生 馬の絵 とってもうまかったです。

資料14 附属小学校 「実習生を送る会」教育実習生に向けた学年メッセージ：第1学年

- (2組)：だいすきだったじっしゅうの せんせいたち
- (3組)：せいのびして
- (1組)：せいのびして
- (2組)：うーんと せいのびして
- (3組)：ゆめを かなえていってくださいね。
- (1組)：わたしたちは せんせいたちの おうえんだんです。
全 員：おうえんだんです！
- (2組)：16にちかん、ありがとうございました。
全 員：ありがとうございました！

資料15 附属小学校 教育実習生の実習終了後の感想

○ 教育実習生の感想 (学級通信 [6年生])



③ まとめ

この取り組みを、「かかわる力」との視点で整理すると表4のように関連付けられる。

表4 附属小学校 「かかわる力」と「お別れのことば」との関連

能力	内 容	「お別れのことば」との関連
傾聴力・発信力	・相手の考え・意見を受け止めて、仲間同士の考えのよさや共通点・相違点を考えたり、複数の考えが整理できないか考えたりしながら聴くことができる。	・教育実習生との出来事や思い出の収集

状況把握力	・状況を判断するために、周囲からできるだけ正確な情報を得ようとする。 ・入手した情報をもとに自他の状況を冷静に見つめ、整理することができる。	・教育実習生との出来事や思い出の収集 ・どの出来事や思い出を取り上げて整理するかを検討
課題設定力	・多様な情報を収集し、整理・分析するなどしてまとめることができる。	・どの出来事や思い出を取り上げて整理するかを検討
方法選択力	・今までに学んだ知識や収集した情報、経験を最大限に発揮し、様々な方法を用いて解決することができる。	・心に響くことばとしてどう表現して「お別れのことば」とするかを決定

「かかわる力」の双方向性

この一連の教育実習に係る取組は、「お別れ式：実習生を送る会」に集約されるように、子どもたちも教育実習生もお互いに3週間の学校生活をつうじて培われた絆そのものが「かかわる力」であるといえよう。

子どもたちは、それぞれに教育実習の中心となる授業のみならず、学校生活の一コマ一コマを振り返りながら、思い出の表現（お別れのことば）に至る過程をとおして、「かかわる力」の能力（課題設定力や方法選択力等）が培われていく。

教育実習生も自身の思いをどう子どもたちに表現するか、「かかわる力」を発揮することになる。

附属中学校

本校教育実習のうち、特に集中するのは、8月下旬から9月中旬までの4種類の実習（中学校コース実習Ⅱ、教職大学院実習、副免実習、本校卒業生実習）である。この中で、実習Ⅱで取り組んだ学生の記述をもとに「かかわる力」との関連性について整理していきたい。

中学校における「かかわる力」の5つの能力は以下のとおりである。試みに、教育実習の授業づくりをイメージするとともに、「かかわる力」の5つの能力を育成することを意図した場合の教育実習生に期待する姿を以下に示す（表5）。

表5 附属中学校 「かかわる力」を育むことを意図した場合の教育実習生に期待する姿

能力	中学校	教育実習生に期待する姿
傾聴力・発信力	・相手の話をしっかり聴いてから、自他の考え方・意見を整理し、相手にわかりやすく伝えることができる	・生徒の発言を聞き分けて、それぞれの生徒の考え方・意見を整理し、本時のねらいに迫るための方向付けを具体的に示すことができる。
状況把握力	①情報源に注意しながら、複数の情報源から正確な情報を得ることができる。 ②入手した情報をもとに、周囲の状況（配慮すべき対象も含めて）から自他が求められている役割や、自他のよさや特性を生かした役割を把握することができる。	・教材からの情報を生徒が手がかりとすることができるよう発達段階に合わせて用意することができる。 ・全ての生徒が自分の役割を主体的に行うことができるよう前もって役割を検討したり、必要に応じて臨機応変に役割を与えることができる。

課題設定力	<p>①自分の考えを他者の意見と比較しながら、解決すべき問題について、客観的に整理することができる。</p> <p>②解決すべき複数の問題群から、優先順位をつけて取り組むべき課題を明らかにすることができる。</p> <p>③課題を明確にするために他者の意見を積極的に求めることができる。また、意見を振り返り、交流してさらによいものに行うことができる。</p>	<p>・自分の意見をもつ時間を確保したり、他の意見と比較させる時間を与えることで、解決すべき問題に迫らせるよう働きかけることができる。</p> <p>・複数の問題について吟味するための具体的な視点を例示して、優先的に取り組むべき課題は何なのか迫らせることができる。</p> <p>・課題設定を確かなものにするため生徒同士の意見交換の場を設けたり課題解決の手がかりとなるよう生かしたい考え方はメモを取るよう適切に指示をすることができる。</p>
方法選択力	<p>①課題解決に向けて、進行状況や場の状況に合わせて、計画を立案・修正することができる。</p> <p>②今までに学んだ知識や収集した情報、経験を最大限に発揮し、お互いに協力して従来の常識や発想を転換したり、複数のものを組み合わせたりしながら新しいものや解決策をつくり出すことができる。</p>	<p>・課題解決のための方法・計画を考える時間を確保すると共に、互いの計画案について意見交換し、修正をかける重要性に気付かせることができる。</p> <p>・課題解決のため、今までに学習した内容の振り返りや立場を変えて見直す等の的確な指示により、具体的な解決策への導かせることができる。</p>
課題遂行力	<p>・何事に対しても自発的に強い意志をもってかかわり、最後までやり遂げることができる。</p>	<p>・教材分析と生徒の実態把握をもとに、生徒が主体的に取り組む授業を構想し、実践することができる。</p>

教育実習生の実状を教育実習録の記述から検証していくことにする（表6）。

表6 附属中学校 「かかわる力」の育成の観点からみた教育実習生の実状

能力	教育実習生に期待する姿（再掲）	実習録の記述例
傾聴力・発信力	<p>・生徒の発言を聞き分けて、それぞれの生徒の考え方・意見を整理し、本時のねらいに迫るための方向付けを具体的に示すことができる。</p>	
状況把握力	<p>・教材からの情報を生徒が手がかりとすることができるよう発達段階に合わせて用意することができる。</p> <p>・全ての生徒が自分の役割を主体的に行うことができるよう前もって役割を検討したり、必要に応じて臨機応変に役割を与えることができる。</p>	<p>・E級の授業を観察しながら指導する立場でものごとを捉えるようにした。そのような視点で授業を参観すると様々な工夫が見えてきた。漢字にルビをふることであったり、1時間の授業の流れを全体で確認することであったり、一人一人のニーズに合った工夫が成されていた。</p> <p>・思うような答えが出ないときや発問よりも前に良い答えが出るなど、生徒がどう思考するのか、しっかり想定していなければ授業に迷いが生じ、その様子に生徒も戸惑う。大事なのは生徒の思考を想定することだけでなく、生徒がそのような答えを出したときにどう対応するかだ。</p>

課題設定力	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意見をもつ時間を確保したり、他の意見と比較させる時間を与えることで、解決すべき問題に迫らせるよう働きかけることができる。 ・複数の問題について吟味するための具体的な視点を例示して、優先的に取り組むべき課題は何なのか迫らせることができる。 ・課題設定を確かなものにするため、生徒同士の意見交換の場を設けたり、課題解決の手がかりとなるよう生かしたい考え方はメモを取るよう適切に指示をすることができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートの問いに答えるだけでは生徒主体の学びとは言えない。生徒が自ら疑問を解決し、学習していく学びとしていくために、先生として何をすべきか考えていきたい。 ・発問、指示をはっきりとすることや生徒の意見に対する反応についてである。指導案の中で流れは決まっても、生徒の意見に対する反応や様子が違えば、臨機応変に対応していかねばならない。 2校時の反省を踏まえ、4時間目では、説明をできるだけ短く、要点を押さえたものにし、自薦・他薦の発表スタイルに評価を踏まえた指名を加える形となった。また、生徒の意欲をあおる発言を取り入れたことで多少学級の雰囲気が悪くなったようである。
方法選択力	<ul style="list-style-type: none"> ・課題解決のための方法・計画を考える時間を確保すると共に、互いの計画案について意見交換し、修正をかける重要性に気付かせることができる。 ・課題解決のため、今までに学習した内容の振り返りや立場を変えて見直す等の確かな指示により、具体的な解決策への導かせることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「先生、今日はスピードが速い。」という声が聞こえてきた。担当の先生から「もっと問いについて自分の考えを言いたかったのでは」という助言があった。生徒がもっと考えたい、もっと意見を深めたいという気持ちがあるということを受け止め、その時間を確保するために、何を優先して、何を短くしていくのか。次時から考えていきたい。
課題遂行力	<ul style="list-style-type: none"> ・教材分析と生徒の実態把握をもとに、生徒が主体的に取り組む授業を構想し、実践することができる。 	

5つの能力に関連する記述を全て参照することは難しいが、「状況把握力」「課題設定力」「方法選択力」などにつながる記述が確認でき、学部実習生の質の高さが伺われる。また、学生の実習録には以下のような記述が見られる。

「授業をした教材を見る度に生徒の顔を思い出さだろうし、生徒とともにつくった授業はこれからの私の学びの大きな活力となるだろう。……他人の授業を見て、自分の授業を振り返る。…そこで得たものも多かった。…次々に学ぶことがある中で、生徒にも教えていかねばならない。しかし、この忙しさこそ充実と思えるようになった。これが15日間の大きな変化かもしれない。」

この記述から、本学生は大変謙虚であり、また「かかわる力」の諸能力を達成するののみならず、前向きな姿勢をもっていることは明らかである。

3 考察

本稿では、幼稚園での「好きな遊び」、小・中学校での各教科（小：音楽、図画工作、中：社会、数学）、そして教育実習指導をとりあげた。これらは3附属学校園それぞれにおいて年間にわたり日常の教育課程を実現する基盤的な教育活動を構成する。これらの教育活動はどのように「かかわる力」を育成しているか。その特質をここに整理しよう。

第一に、「好きな遊び」、教科、教育実習指導において「かかわる力」の5つの諸能力は、保育過程、授業過程の一部において育まれている。「好きな遊び」において自分の気持ちを相手に伝える行為、小学校の音楽科「音のスケッチ」、図画工作「糸のこドライブ」で作品を相互に批評しあう活動は、「傾聴力・発信力」を育んでいる。中学校の第3学年社会科「現代社会の見方や考え方」、第1学年数学科「平面図形」の実践では、それぞれ「望ましい年間可能漁獲量の割り当てについての提案」や「用語や記号を使って、自分なりに作図のし方の説明」を個人やグループで検討・方向付けしていく過程を通して、「課題設定力」を育むことができる。「かかわる力」が授業の一過程において部分的に重んじられるという点で、“附属ならでは”の活動としてとりあげた諸事例（幼：「わらべうた遊び」、小：「いとし子命の集会」、中：「合唱コンクール」）と共通する。これらと対比すれば、「好きな遊び」、各教科等は、日常の基盤的な活動として、子どもたちの「かかわる力」の諸能力はもっとも力強く持続的に、広範囲に育まれていると考えられる。

第二に、「かかわる力」は、基盤的な教育活動のなかでも、教育実習指導において質的に卓越した姿として育まれている。小学校の「実習生を送る会」は、児童たちが計画、運営する。教室ごとに行われるこの会の「課題遂行」によって、送られる実習生は、3週間の本実習期間と、それにいたる一連の実習プロセスをふり返りながら、最後の場面でのもてなしに、ひとしく感激する。そのもてなしは、たんに「感謝」の表現（資料13、14）として終わらない。種々の演出をとまなう子どもたちのその心にふれ合う経験によって、実習生はあらためて教師となる意欲を喚起する。いい先生になることを決意する。そのような力が子どもたちによって発揮されている。その力は「かかわる力」といいよい。子どもたちにその「かかわる力」を自発的な姿で発揮を促し、導いているのは、教室の側面で見守っている教師たちであった。その促しも、一連の実習指導の一環である。中学校での実習でも、同様である。2で紹介した実習生（表7）は、次のような決意を述べている。

「一斉視察の授業であるからより完璧に授業をしなければならないことはもちろん、実習最後の授業、生徒との最後の授業としてみんなの記憶に残るものとしたかった。授業が終わった後、生徒から「先生、よかったですよ。」「詩が良かったです。（詩を書いた）紙をくれませんか」という言葉をもらったとき、改めて実習が終わるのだと、もう授業することはないのだと実感したとともに、この生徒を教えることができよかったです、私は幸せ者だと思えた。今はただ、先生になりたい、なるのだと決意した。…」

生徒たちが、この実習生をはじめ、多くの実習生に多くの励ましの言葉をかけていた。このことは、生徒たちが「大人」である実習生を「育てる」側にもいることを示している。「かかわる力」は、教育実習指導において児童生徒によってこのように卓越した力として発揮される。

第三に、基盤的な活動を通じての「かかわる力」は、その力の発揮を可能にし、効果的に促している不可欠な条件がある。子ども自身の主体的活動をあたたかく受け入れ、教師との基本的信頼関係を築き、気持ちの安定を図っている受容的な環境である。幼稚園での「好きな遊び」が、顕著にそのことを示すことはいうまでもない。小学校の第5学年音楽科（滝トレッキング）の実践では、五感をとおして体験、体感したものを音に表現することにより、「傾聴力・発信力」や「課題設定力」を育むことが期待される。第5学年図画工作科（糸のこドライブ）の実践では、1枚の板から生み出された複数の板片の組合せをもとに、イメージを膨らませて作品に仕上げていくことで「傾聴力・発信力」「状況判断力」「課題解決力」を育むことが尊重さ

れる。中学校の各教科でも教師の適切な指導の下で、個人で考え、自分の考えをもつ時間とグループで人とかかわり合う時間、話し合う時間が数多く意図的・計画的に設定されている。

3 附属学校園において「かかわる力」は、「好きな遊び」、教科、教育実習指導等の基盤的な実践を通じて以上のような特質を示して育まれている。

執筆分担：

- 1 河原国男
- 2 1) 福島裕子
2) 鵜戸周成、安藤真二
3) 鵜戸周成、安藤真二
- 3 河原国男、安藤真二、鵜戸周成、福島裕子